千日紅

夏

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
千日紅

【Ｎコード】
Ｎ８３３８Ｗ

【作者名】
夏

【あらすじ】
タイムスリップから始まり白夜叉バレ、攘夷復活と王道的な物語をミックス！
荒れ狂う時代の波に巻き込まれていく江戸。
その時銀時は、桂、高杉、坂本は、真選組は、万事屋は、歌舞伎町は・・・。

プロローグ

あなたの過去を覗いた時
わたしはあなたの苦しみを見た。

あなたの真実を知った時
わたしはあなたの悲しみを見た。

あなたと共に闘うと決めた時
わたしはあなたの笑顔を見た。

千日紅
誰も悪くない

ただ、荒れ狂う時の流れに呑まれただけ
ただ、その波から救い出そうともがき
ただ、ひたすらに溺れていただけ
そのことに気付かぬまま
生きた
それだけ
ぼくらは何も変わらない
ぼくは何も変われない
きみもぼくを変えられない
ねえ、ごめんね。
終わりのない友情

それが花言葉

人って危機的状況の時必ず変われる

「あ～暇だ～」

「暇アル～」

「（イラッ）だったら仕事さがしてこいやァァァァァ！！！！」

ある暖かな日差しが入りこむ穏やかな休日。さわやかな風が吹き込むこの万事屋で叫び声が上がった。

「うっせーな～。パッツァンよぉ～。お前も知ってんだろ？万事屋なんてこのご時世流行らネェんだよ。いらないんだよ。僕ら世間に不必要な人間なんだよ。」

「そうアル。銀ちゃんはただのマダオアル。マダオなんてこの世に不必要アル。消えろヨ。」

「ちょっと～！！！神楽ちゃ～ん！？なんか銀さん１００ポイントぐらいダメージ受けちゃったんだけどォォォ！？しかもなんで俺だけなんだよ！？オメェらも一緒だかんな！！！万事屋なんかでバイトしてる時点で終わりだかんな！！！」

「何自分で自分の首絞めてんだァァァァァ！！！ちょっとは自分の仕事に誇り持てェェェェ！！！」

「さっきからうるさいアルナァ。黙れヨメガネ。」

「メガネ割るぞメガネ。」

「メガネ言うなァァァァ！！！て言うか、ホントにまじめに仕事さがしてくださいよ銀さん！今月やばいですよ！赤字ですよ！！！」

「そんなんいつもだろーが。バカか。」

「今月も何も、わたし達が赤字から抜け出せたことなんかないアル。バカアルカ。」

「ハア～。そんなことわかってますよ。でもね、今回はダメです。なんたって、神楽ちゃんの酢昆布一個買えるだけしかないんですから・・・。」

「オイィィィィ！！！！！なんじゃそりゃァァァァァ！！！！！」

「マジあるカ！？酢昆布買えるアルカ！！！！！」

「何嬉しそうな顔してんだァァァァァ！！！！！買わねえかんな！！！俺のアイスだかんな！」

「そういう問題じゃないでしょーがァァァァァ！！！！！」

「そうアル！絶対に酢昆布は譲らないネ！」

ピンポーン

いつもはただ、面倒くさくて無視するこの音が、今日ばかりは幸運の鐘の音のように万事屋に響いた。

万事屋3人は、それはもう驚くほどの早さで、しかも驚くほどの笑顔で金ヅル・・・ゴホン。お客様を招いた。が・・・

「「「ようこそ万事屋銀ちゃんへ！！！・・・・・・・・・・ッチ」」」

「オイーーーーー！！！！なんだそらァ！！！！それが客に対する態度かアァ！？！！！」

そこに居たのは、お客様としてはとっても良い金ヅルなのだが、何かと万事屋とはうまが合わない真選組であった。

「ッチ。税金ドロボーかよ。ッチ、仕方ねえなぁ～。いつもなら追

い返すところだが、今日だけは入れてやるよ。ッチ。」

「っチ。まあ、今回は本当にやばいからナ。仕方ないアル。ッチ。」

「ちょっとふたりとも！いくらなんでも失礼すぎですよ！・・・・（ッチ）。」

「ちょっと新八くーーーぅん！？君まで！？そんなに嫌だったぁーー？？？」

「落ち着けヨ、ゴリラ。ボコボコにして動物園送りにするアルヨ。」

「神楽、よせ。これ以上はゴリラがウザくなるから。」

ゴリ・・・近藤は万事屋の玄関のはじにしゃがみ込み暗い雰囲気を醸し出していた。

「はあ。まあ入れや。」

この時ここにいた誰もがあんなことになるなんて思ってもいなかった。

おもちゃ箱に残るのはガラクタばかり（前書き）

銀ちゃん誕生日おめでとぉぉぉぉぉぉ（ノ゛д゜ノ。・わーい・。＼゛д゜＼）

はい。五日遅れです。ごめんなさい。

でもおめでとー（●≧艸≦）〃

おもちゃ箱に残るのはガラクタばかり

先ほど玄関でひと騒動起こした一行は、今は万事屋のリビング兼応接室のソファーに腰を落ち着けていた。
そこに、雑用係である新八が人数分のお茶を用意して銀時の右側に座った。

ちなみに、神楽は銀時の左に。目の前には右から順に近藤、土方、沖田が座っていた。

「んで。今日は何しに来たの？依頼に来たんだろう？」

「ああ。それが・・・」

＊＊＊＊＊＊

「とっつぁーーーん！」

「おお。来たか。」

ここは真選組屯所の局長室。
そこにはなぜか、局長の近藤ではなく、警察庁長官松平片栗虎が座っていた。

「とっつぁん！屯所に来る時は連絡してって言ってんじゃん！！！隊士たちがパニックになっちゃうからって！！！」

「お～お～。そんなことより近藤。お前これ調べろ。」

「はあ。これって・・・何？」

「だぁかぁら、調べろ言ってんだろぉが。」

「えッ！これ、帽子？もしかして天人の？」

「そぉ～何だよ。んじゃ、どういうもんか調べとけよ。おじさんは娘の警護しないといけないから。俺の娘に手ぇ出す奴ァ生きて帰さねぇ。」

「ちょっ！とっつぁん！！！」

片栗虎はそのまま振り返ることなく屯所を出て行った。

「どーしよう・・・。」

「ん？どうしたんだ近藤さん。ってか今とっつぁん来てなかったか？」

「うん。それでさ・・・。カクカクシカジカ。」

なんとも、古典的な説明を始める近藤に土方はいたって真剣に聞き、考えるしぐさをした。

「で、これがその変な帽子か。」

「なんなんですかねィこれ。」

「・・・なんでおまえがここにいる？総悟！」

「別にいいじゃねぇですかィ。んで、それ。調べるって何をどう調べるんですかイ。」

明らかに仕事をさぼっていた総悟に腹が立つ土方だったが、総悟は興味津津で聞く耳を持たなかった。

「ったく。とっつぁん適当すぎんだよ。しっかし、どーすっかな。なあ近藤さん。」

「万事屋に頼んでみてはどうだろう。」

＊＊＊＊＊＊

「と言うわけだ。」

「違うううううう！！！なんでンな危なえモン俺が調べなきゃなんねェんだよ！！！」

「テメェ万事屋だろ！そんくれェやれや。」

「いいや。ウチは命の危険につながるよーな仕事は引き受けないんで！」

「はあ。そうですね。仕方ありませんよ。・・・・銀さん？早くやりましょう？」

「そうアル。銀ちゃんチャッチャと調べるアル。」

「新八くぅぅぅぅん！！！！神楽ちゃぁぁぁあん！！！！」

「んじゃ、交渉成立ですねィ。」

「ちょっと待った！えッ！？何？？？？なんでこっちに来んの！？なんで俺の腕掴んでんの！？」

あまりの（金銭的な）危機に陥る自分たちに新八と神楽は真選組側についた。
また、そんな二人に裏切られた銀時は、なぜかじりじりとにじり寄ってくる沖田の手にあの帽子が握られているのを見て逃れようと暴れだした。だが、横に座っていた子供たちに抑えられそれは叶わない。

「お願いしまさァ。旦那ァ。（（黒笑」

ドＳっ気たっぷりの笑顔で沖田は銀時の頭にあの帽子をかぶせた。

「ぎゃぁぁぁあああああーーーーー！！！！！――――――――ッ！？！？・・・・・・」

「銀ちゃん・・・？」

「銀さん？銀さん！！」

突然銀時は目を見開き苦しみ始めた。息も乱れ、いつもの飄々とした銀時の姿はかけらもない。
さすがの真選組も焦りだし、銀時の肩に手を置こうとした時――――

――――――――――――――――ドサッ

「いった。んだよ？」

「どこですかィここ。」

「チャイナさんに新八君。大丈夫か？」

「あっ、はい。」

「銀ちゃんは！？て言うか、ここどこアルカ？」

万事屋にいた銀時以外のものはみな、見知らぬ土地にいた。

そんな5人の目の前には、自然のあふれる、江戸ではもう見られない、どこかのどかな田舎町が広がっていた。

あきれるほどはしゃいだ僕らで過ごしたあの場所

目の前に広がるのはどこまでも広がる田んぼと畑。

風は心地よく吹き、空気は澄んでいる。

まず、江戸ではない。

「ここ、どこなんでしょうか。というか、銀さん大丈夫かな。あんなに苦しんでたのに・・・。」

「あの帽子は未知の代物だからな。どんなことが起きても不思議じゃねぇってことだ。」

「お前ラ銀ちゃんのとこ帰ったら覚えとけヨ。」

「なんか人が来ますぜィ。話しかけろよ土方コノヤロー。」

各々がまだ現状を読み込めないまま騒いでいると、前方の田んぼと田んぼの間の細道を人が二人歩いてきていた。

「あれァガキじゃねえか？」

「あ！こっちに気付いたアル。」

「え・・・なんかめっちゃ走ってきてますよあの子たち。なんか、めっちゃ早いですよ！！」

「うっさいアルナぁ。黙れヨ。メガネ」

「今メガネ関係ないィィィィイイイイイ！！！！」

「お前ら何者だ！！！！」

あっという間に土方たちの目の前に現れた二人の少年はズイと詰め寄った。

「いやぁ。おじさんたちは～えーっとぉ。」

「旅してんだ。」

自分たちが状況を飲み込めていない中、他人に説明なんて無理であった。

そんな時、さすがはフォローの土方。一行はここは土方に任せることにした。

「旅？そんな軽装でか？」

「怪しいな。」

「あっちに車があるからそこに荷物は置いてんだ。」

「車に？ここは車が休みに来るようなところではないぞ？歩いて来る旅人はよくいるが。」

「なに言ってるアルカ？車が休むなんて馬鹿アルカ？」

「ちょっ！待て。なあお前ら。ここはどこだ？元号は？」

「おいトシ！どーした？」

「黙っててくれ近藤さん。俺の間違いならいいんだが・・・」

「よくわからぬが。ここは萩で今は天保だが。」

「「「「天保！？！？！」」」」

「天保？何アルカ？それ？？」

「つまりね神楽ちゃん。元号は日本の古い年代の言い方で、それが天保ってことは・・・」

「俺たちは今、過去に居るってことだ。」

「タイムスリップってやつですかィ。」

「まじカヨ！」

「オイ！お前ら叫びだしたかと思えばなにこそこそ話してんだよ！」
二人の少年のうち、目つきの悪いいかにもガキ大将のような少年が尋ねた。というよりも、八つ当たりした。

「ああ、悪い。俺たちは確かに車でここまで来たんだが、休憩するといわれて散歩してたら、荷物全部持って逃げられたんだ。」

ここでもフォローが炸裂する土方に、全員頭が下がった。
あの少年たちも気の毒だという感じで何やら話していた。
そして、話がまとまったのか、高いところで髪を結っている少年が前に出た。

「それは大変だ。おぬしら先生のところへは来ぬか？」

「先生？」

新しく出た人の名前に、新八が聞くと、今度は目つきの悪い少年も前に出てきた。

「そうだ。ここらで有名な松下村塾の先生だ。」

「うむ。先生はとてもお人がよろしいから貴様らのこともなんとかしてくれるだろう。」

土方、近藤はさっきの少年の言葉に目を見開いた。
その言葉というのは『松下村塾』。松下村塾と言えばかの有名な大物攘夷浪士『桂小太郎』、そして超過激派攘夷浪士『高杉晋助』を輩出したという現世でも有名な塾である。

そこで土方はある事を考え始めた。
あの目つきの悪い少年は現世のある者に似てはいないか・・・？
あの高く髪を結った礼儀正しい少年は現世のある者に似てはいないか・・・？と。

「なあ、お前ら名は何だ？」

「人の名を聞く時は自分から言えや。」

「馬鹿者！お前は目上の人に口を利くときは敬語使いなさいと先生に言われておるだろう！」

「いってッ！」

バシッと言ういい音を出してはたかれた目つきの悪い少年は顔をムスッとさせ、そっぽを向いた。

「しかし、こ奴のいうこともまた然り。先生も言っていたからな。『人の名を訪ねる時はまず自分から名のりなさい。』とな。」

「ああ、すまなかった。俺は土方十四郎だ。」

「近藤勲だ！よろしくな！」

「沖田総悟でさァ。」

「志村新八です。」

「神楽アル。お前らも名のれヨ！」

一通り名のり、次は二人の少年だ。
土方は生唾をゴクリと飲んだ。

「俺は桂小太郎と申す。こっちの目つきが悪いのは・・・」

「高杉晋助。」

全員に衝撃が走った。

あの大物攘夷浪士の過去。
これは、案外来て良かったと真選組３人は仕事魂が燃えた。
しかし、子供たち二人は、特に神楽が、あのいつもなんだかんだで仲良くしている桂のかわいい姿に目をキラキラさせている。そして、あの狂気に笑う獣のような高杉のあり得ないほどかわいい姿に驚いていた。

「おい。行くぞ。」

「先生のところはこちらだ。」

5人は一度顔を見合わせてから、二人の小さな背中を追いかけた。

鉛色の空に鳴る鐘

二人の少年。桂小太郎と高杉晋助に連れられてやってきた土方たちは例の塾の前にやってきた。
なんでも、塾は講師の吉田松陽の自宅と連なっているらしい。
今日は塾は休みだという二人は、自宅の玄関の方へ歩いて行った。

「松陽先生！いらっしゃいますかー？」

「せんせー！変な奴ら連れてきたー！」

『変な奴らって・・・（（汗』と思いながらも二人が玄関に入って行くのを後から追う。
すると、そこには目を疑う光景があった。

「だれ？こいつら。」

この子供特有の高い声で殺気をバンバン放つ少年。どこかで・・・
というか、絶対に間違いない。
こんなに白い奴は自分たちが知っているあの人以外居ない。
神楽は先ほど桂たちを見たときよりも目をキラキラと輝かせ、新八すらもとっても笑顔で銀時を見つめている。沖田は嬉しそうに目を見開き、近藤は『おお～！』とわけのわからない歓声を上げていた。

しかし、土方だけは他とは様子が違っていた。
あの桂と高杉と共にいた。たとえここが過去とはいえ、奴は桂と高杉とつながっていやがった。しかし、現世の奴は胡散臭い仕事をしてはいるが、歌舞伎町、もしくは江戸でも名の知れる男で、信頼も厚い。何より、子供たちから年寄りまでに慕われているのが証拠だ。しかし、あの強さ。かの戦に出ていたのは言うまでもないだろうと踏んでいた。ではなぜ現世の奴はこの二人と共には居ないのだろうか。

と、さすがは鬼の副長。と言いたいところだが、ここでも仕事の方に頭が働く自分に土方はあきれた。

「銀時お前今起きただろ。寝癖すげえぞ。」

「うむ。銀時！ちゃんと早起きしなさいと言ってるだろう。もしかして昨日は遅くまで起きていたのか！ちゃんと早寝しなさいって言ったであろう！」

「うるせェエエエ！！！お前は俺の母ちゃんか！！！」

「それも良いかもしれぬ。」

「おやおや。どうしたのですか。三人とも。というか、後ろの方々は？」

「あっ！先生おはようございます！」

「おはようございます！松陽先生！！」

二人から先生と呼ばれた男は、色素の薄いきれいな長い髪を下ろした、とても優しそうな人だった。

「はい。おはようございます。銀時も、おはよう。」

「うん。」

「おい銀時！朝はおはようございますだろ！」

「そうだぞ銀時。あいさつは一日の始まりを表わすのだぞ！ほら！」

「ではもう一度。銀時、おはようございます。」

「お・・・おはよう・・・。」

「よくできました。」

そんな微笑ましい家族のようなやり取りを見ていた5人に桂は「そういえば！」と思いだし、松陽に事情を話した。すると、松陽はあっさりと5人を家に入れ、松陽の部屋で全員腰を落ち着かせた。

「本当に皆さん大変でしたね。私は、ここで私塾を開いている吉田松陽と申します。旅の準備がまた整うまでは、どうぞこちらでごゆっくりして行ってください。」

「いや~。本当にありがとうございます。俺は近藤勲です。今後よろしくお願いします！」

「土方十四郎だ。よろしく。」

「沖田総悟でさァ。よろしくお願いしやす。」

「志村新八です。よろしくお願いします！」

「神楽アル！よろしくネ！それよりもお前銀ちゃんのパピーアルカ？」

神楽は、今はここにいないが、奥からガヤガヤと騒ぎ声が聞こえる子供の声の一人、あの銀色の事が気になって仕方がなかった。４人は少し反応したが、気になるということは同じようで、黙って松陽に顔を向けた。

「銀ちゃん？・・・ああ！銀時ですね。」

「そうアル！銀ちゃんの銀色めちゃくちゃキレーネ！目もふわふわの髪の毛も全部かわいいアル！！」

「ふふ。そんなこと言ってもらえるなんて、私も嬉しいです。しかし、あの子はわたしの子ではありません。」

「しかし、さっき高すっ・・・晋助君が『今起きたのか』と・・・・」

「ええ。あの子はここに住んでいるんです。あの子はわたしの子ではありませんが、息子のように思っているんです。」

「と言うことは、銀さ・・・銀時君の両親は？」

「わかりません。あの子は私が拾ったのです。少し、あの子について話しましょう。なんだか、あなた達には話ておくべきだと思うので・・・。」

それから、松陽から聞いたことは、自分たちが思ってもいなかった壮絶なものだった。

銀時は生まれてすぐに親に捨てられ、森の中で生きていたという。しかし、銀時を見たある村人が銀時の容姿に驚き『鬼だ！』と村中に叫びまわったそうだ。それからは、『森には鬼がいる。』と人々は信じ、鬼を殺そうとした。銀時は襲いかかる大人から逃げ、生きるためにその人間達を殺し始めた。鬼退治に行った村人が死んだと聞き、とうとう村人たちは鬼を追い出すため、賊や人身売買関係者たちを雇い、殺そうとした。

そんな時だった。松陽は隣町までちょっとした用事があり、来ていた。そこで興味深い噂を聞いた。『鬼が出る』と。松陽は好奇心に負け、その『鬼が出る』という荒れ地に来た。そこには、先ほど息を引き取ったのだろう数人の男たちの上で握り飯を食らう銀色の髪を持った子供がいた。松陽はとても強い衝撃を受け、子供をなんとか説き伏せて自分の家へ連れて帰った。それが銀時なのだ。

「最初は感情も言葉も何も知らなくて困ったものです。今では言葉も知ってあんなふうに小太郎や晋助達と喧嘩ばかりしていますがね。」

そういうと、松陽は本当にうれしそうに笑った。

新八達は、あのいつも飄々としている雲のように掴みどころがない銀時にこんな壮絶な過去があったのかと、複雑な思いだった。

明日もし悲しみが君を苦しめても（前書き）

遅くなってすみません（＞＜；）

なんか、もうチャチャっと書いて、次のに行きたくなりました。

なんで、取っても飛ばしてます！

どうか、読んでいってください！この駄文を；；

明日もし悲しみが君を苦しめても

松陽の笑顔に少し雰囲気が和らいだ時、松陽が「銀時に自己紹介をしてもらいましょう。」といい、銀時の名を大きな声で呼んだ。すると、軽そうな足音がトタトタと聞こえたかと思うと、部屋の襖の前で止まった。どうやら入るのに戸惑っているようだった。

「銀時。入ってきなさい。」

松陽がそういうと遠慮がちに襖が空き、キラキラと光る銀色の頭が覗いた。

「なに？」

そういいながら顔をのぞかせただけで入ってこようとしない銀時に、松陽は手招きをした。
銀時は土方たちをちらりと見て、駆け足で松陽のそばへ行った。その手には、朝ごはんを食べていたのだろうか、箸が握られたままだった。

神楽と新八は銀時を食い入るように見つめ、満面の笑みを浮かべていた。
近藤と土方と沖田は先ほどの銀時の過去の話を聞いた後なので、少し気まずく思いながら見つめた。

「なに？せんせい。」

「銀時。箸を持ったまま歩きまわっては駄目です。これからはちゃんと置いて来るのですよ？」

「うん。」

「それでは銀時。この方たちに自己紹介をなさい。」

「え・・・」

「塾でも一度したでしょう？ほら。」

松陽に背中を押され、必然的に5人に顔を向けることになった銀時は、少し戸惑いながらも小さな声で自己紹介をした。

「吉田銀時。・・・よろしく。」

そういうと銀時は後ろを振り返り、松陽の後ろに隠れた。
松陽はそんな銀時の頭をなで、よくできました。とほめた。
すると、銀時は先ほどまでのおびえが嘘のように、ふわりと笑った。
そんな銀時を見た5人は、その子供らしい笑顔に驚くと共に心が温かくなった。

「銀ちゃんアルナ！！！私は神楽アル！一緒に遊んでやるヨ！」

「ちょっ神楽ちゃん！抜け駆けズルイ！！！僕は志村新八。よろしくね！！！」

はしゃぐ子供達二人に銀時は少し怯えながらも松陽の背中から顔を覗かせた。松陽は少し興味を持ち始めている銀時に気付き、微笑みながら背中を押し自分のそばに銀時を立たせた。銀時が松陽に目を向けると、松陽は安心させるようにうなずき、銀時も少しうなずいて二人を向いた。

「か・・・かぐら。と、しん・・・ぱち。」

「何ですか？銀時君！！！」

「神楽、新八。あっちで小太郎と晋助と遊ぼ。」

「「うん／はい！！！」」

「せんせ・・・」

「遊んできていいですよ。今日は塾はないですしね。でも！まずはちゃんと朝ご飯を食べなさい。」

「うん。」

そういうと7人は大広間へ行き、桂、高杉と合流して銀時が食べ終わるのを待った。

あれから晋助、小太郎、銀時と神楽、新八、沖田はいろんな遊びをした。
大人組は縁側でそんな子供たちを見つめながら談笑していた。

銀時がこけると、松陽は驚いた顔をし、立派な強い大人になってもらうべく、助けに行きたい気持ちを抑えていた。そんな銀時がまた立ち上がり走り出すと、安堵の息を吐きまた笑顔で子供たちを見つめた。

近藤や土方はそんな松陽を見て苦笑しながらも、総悟が小さい時はそんな感じだったなあ、と思ったりしていた。

夕方になり、小太郎と晋助は元気にあいさつをして帰って行った。
銀時と新八、神楽、沖田はすっかり仲良くなり、じゃれあいながら母屋に入って行った。
土方、近藤、松陽も遅れて入ろうとした。

その時、松陽は何者かに呼び止められ何やら手紙のようなものを渡された。松陽は一瞬鋭い顔つきになったが、すぐに元の様に戻るとお礼を言ってそそくさと母屋に入って行った。
残された近藤と土方は不思議に思いながらもあまり気に留めずに後に続いた。

夕食を食べ終え一息ついていると、松陽が少し真面目な顔で台所から戻ってきた。その後ろには銀時も続いていた。松陽が座ると銀時もその隣に刀を抱えて座った。

「申し訳ありません。」

急に頭を下げこう言った松陽に土方たちは訳が話からず、ただ先を待った。

「先ほど文が届きまして、今日の夜ここに大事なお客様がいらっしゃることになったのです。ですから、みなさんがここに居られると、少し困ることになってしまいました。」

松陽が本当に困ったように言うと、近藤はいつもの人懐っこい笑みで応えた。

「そうですか。では俺たちはづらかりましょう。」

「え～！銀ちゃんと一緒に寝たかったアル！」

「仕方ないよ。神楽ちゃん。」

「申し訳ありません。本当に。」

「いや。今日は本当にお世話になったからな、ありがとう。」

「あの、もしよければ、小太郎の実家へ行かれてみてはどうでしょうか？あの子の家はしょっちゅうお客様を泊めたりしていますから。」

「そうですか、それでは尋ねてみます。」

「それでは紹介状でもお書きしましょう。」

「ああ。頼む。」

松陽は席を立って自室へ向かった。
銀時はなんだか落ち着かないようであった。
そんな銀時に気付いた沖田がたずねてみる。

「どうかしたんですかィ、銀時君。」

「・・・せんせ、いつもと違う。」

「そうアルカ？」

会ってからもうすぐ一日が過ぎようとしているくらいしか経っていない自分達には全く分からないが、ずっと松陽しか頼れる人がおらず、人一倍松陽の変化に鋭い銀時は気付いていた。
松陽が焦っていることを。
小太郎や晋助を見送った後から、一時も銀時から離れようとしなかったことを。
銀時を見る目が、ときどき悲しみにあふれていたことを
今日の晩、何かが起こることを・・・

まだ、誰も知らない・・・

避けては通ることができない道を。

そして、後悔する・・・

あの日の自分を。

アスファルトに刻んだ限りない夢（前書き）

もうすぐでクリスマス
どっちも補習というね・・・。
受験せいでもないのに＞＜！！！

アスファルトに刻んだ限りない夢

近藤達一行は松陽にもらった紹介状を持って桂邸の前に来ていた。

「これ、桂さんの実家ですか・・・？大きい、てか！桂さんってやっぱりお坊ちゃんだったんですね！！！」

「今日こんな豪邸に住めるアルカ！！キャッホーイ！」

子供たちは、まだ泊めてもらえるか分からないというのにハシャイでしまっている。神楽に関しては住む気らしい・・・。松陽宅を出た時は銀時をいつまでも離さないでイヤだイヤだと言っていたクセに、だ。

家の前で声をかけると、従者が出てきたので、用件を伝え紹介文を渡すと、そのままお待ちください、と言い残してまた屋敷に入って行った。

すると、ガラガラ、と玄関が開く音がしたと思うと、ひょっこりと小太郎が姿を現した。

「事情は聞いたぞ。俺が父上を説得したんだ！ありがたく思うがよい。」

昼間のうちにすっかり仲良くなっていたので、最初にあった時のようなよそよそしさはなくなっていた。

「ありがとな！小太郎君！」

「君たちが松陽先生から託った旅の御一行かね？」

「あ、父上！」

「「「父上！！？」」」

これがあの桂の父親。
今や穏健派となり下がったが、大物攘夷浪士である桂を育てた男。
・・・にしては、桂同様物腰の軽そうな穏やかな人だった。

「大変でしたね、松陽殿の紹介なら安心だ。どうぞ中に入りなさい。小太郎、お前に任せるぞ。」

「はい！ありがとうございます！父上！！」

「ありがとうございます。桂さん。」

そんな時松陽宅では、銀時と松陽が縁側で夜風に当たっていた。

「せんせい、大丈夫？」

「え？何がですか？」

「なんか、変。」

「変って・・・；私はいつも通りですけどね？」

「違う。せんせい、苦しそう。大丈夫？」

「銀時・・・、私は大丈夫です。心配してくれてありがとう。」

そういうと松陽は汗で少し濡れているが、それでもふわふわな銀色の頭をゆっくり、かみしめるように撫でた。

「ねえ、銀時？」

「なに？」

「今、幸せですか？」

「しあわせ？」

「そうです。前に教えたでしょう？」

「心が暖かくなるやつ？」

「そうです。」

「んー・・・。じゃあ、今ぽかぽかしてるから、すっごく幸せだよ！」

「そうですか。それでは、もうひとつ。銀時は将来どんな大人になりたいですか？」

「んーと、・・・」

「小太郎のように医者になりたいですか？それとも、晋助のように武士になりたいですか？」

「わかんない。」

「フフ、そうですよね。まだ分からないですよね。・・・じゃあ、あなたの武士道を教えてくれませんか？」

「ぶしどー？」

「私と銀時が初めて出会った時の事覚えていますか？」

「うん。」

「その時、私が言いましたよね？『刀の本当の使い方を知りたければついてこい』と。」

「いった。」

「つまり、刀をどう使うのか、刀であなたは何をしたいのか、それが武士道なのです。銀時はどんなふうにその刀を使いたいですか？その刀でなにをしたいですか？」

「せんせい、教えてくれてない。」

「確かに私は『知りたければついてこい』といいましたが、これは銀時。あなたが自分で見つけなければならないのです。」

「俺が？」

「そう。銀時、あなたの武士道は何ですか？」

「俺の武士道・・・」

すっかりと考え込んでしまった銀時を松陽は穏やかな顔で見守った。すると、銀時は何かひらめいたかのように顔を輝かせていった。

「俺はこの刀で先生みたいになる！」

言い終わると銀時はニシシッとしたり顔で笑った。

「私みたいに？どうしてですか？」

「だって先生強い。俺たちの事守ってくれる。助けてくれる。心ぽかぽかにしてくれる。俺も先生みたいになりたい。先生を守りたい。小太郎と晋助も守りたい。これじゃ、ダメ？」

銀時の素直な言葉に心からの言葉に松陽は目がしらが熱くなるのを覚え、銀時を思い切り抱きしめた。
今になって後悔した。この子も共に・・・と思ってしまった自分を。

「いいえ。嬉しいです。ありがとう、銀時。」

「せんせ、やっぱり大丈夫じゃない。変。」

松陽は銀時を離すと真剣な顔に変え、銀時を見つめた。
この子だけは助けよう。こんなところで、私が勝手に持ち去っていい命じゃない。
この子には未来がある。明るい未来が、きっと幸せな未来が。
そこに私は居ないけど、きっと銀時なら強く生きてくれる。
私がいなくっても、きっと大丈夫ですよね。銀時・・・

銀時も松陽の変化に気付き、言葉を待つ。

「銀時。今から私が言うこと聞いてくれますか？」

「・・・うん。」

松陽は深呼吸をする。空気がピリピリとしてきた。もう、近い。

「今から裏の出口から出て行きなさい。」

「え・・・？」

「最後まで聞いて。出たらとにかく走って山を下るのです。そしてら前に私と二人で来たことがある広場に着きます。そこから左手に出ると銀時もよく知っている道に出るでしょう。そしたら村長の家覚えていますよね？そこへ行きなさい。きっとすぐに察してくれます。」

「せんせいは？せんせいはどうするの？」

「私は・・・先程近藤殿にも行っていたでしょう。大事にお客様がくるので、お迎えしなければならないんです。」

「じゃあ俺も居る！邪魔しない！」

銀時は嫌な予感がしていた。己のこの戦場で培った第六感は嫌な時ほどあたることを知っている。

ここで本当にここを出て行ってしまえば、松陽に二度と会えなくなる。
そう、心が銀時に叫んでいる。
ダメだ。絶対に離れてはダメだ。
そう、心の中で繰り返した。

「お願いです。銀時、言うことを聞い」

ガラガラ・・・
突然、前触れもなく玄関が開く音に松陽の言葉は遮られた。

「もう、来てしまった・・・。」

松陽の聞いたことのない絶望の声がこだました。

サヨナラは言わないよ泣き叫ぶ風息が止んだころにもう一度出会えるから（前書

年内に第一章終わりたいな～。

まあ、無理かな。（ 。— 。）

それではどうぞ！

サヨナラは言わないよ泣き叫ぶ風息が止んだころにもう一度出会えるから

遠慮もなく入ってくる足音が一つ。
ギシッ、ギシッ、と少しづつ近づいて来る。
銀時は理解できぬ恐怖に震えた。すると突然身体が浮いた。
松陽が銀時を担いだのだ。

「ちょっ、せんせッ！！！おろせ！！！！」

銀時の制止の声も聞かずに松陽は部屋へと入り、手近にあった襖を開ける。
その手前に銀時を下ろすと、自分も銀時の目線に合わせてかがんだ。
真正面から見た松陽はいつものように、優しく、微笑んでいた。

「銀時。」

じっと銀時を見つめる松陽。
銀時も見つめ返す。
そんな間にも謎の足音は近づいている。

「これから最後の授業をします。」

“最後”

その言葉に銀時はすべてを察した。

松陽は死ぬんだ。

きっと、いや。確実に。

どうにかして助けたいと思うが『どうすることもできない』と、脳は案外冷静に理解していた。

それでもイヤだイヤだと心が叫ぶ。

なにもできない、動くことも、松陽の手を引いて少しでも逃げることも、声を出すことも、なにも。

それでも心は叫ぶ。

何とも言えない感情が渦巻く中、松陽の声は、スッと身体中に響いた。

「人は誰しもいつかは死んで行きます。その死に方はそれぞれですが、それは自然の道理なのです。避けることはできない。逆らってはいけない。」

ギシッギシッ。
足音が近づく。

「でもね、銀時。それは決して悲しいことではないのですよ。」

スー、襖の開く音。
畳が軋む音。
また、襖の開く音。
畳が軋む音。

「死んでも人は生き続けられる。ここ、でね。」

そう言って松陽は自分の胸をトントン、とたたいた。

「だから銀時。どうか寂しく思わないで。一人だと思わないで。あなたには仲間がいる。そして、私もあなたの心の中で生き続ける。ずっと、ずっとです。ですから、これだけは覚えていてください。

これからはあなたが思う道を歩んでいきなさい。自分を抑えすぎてはいけませんよ。あなたはすぐに自分の胸にいろんなものを抑え込んでしまうから。小太郎や晋助を大切にするのですよ。あの子達はあなたが道に迷った時、きっと帰り道を灯す明りになってくれるでしょう。だから、銀時もあの子達が道に迷ったら、照らしてあげなさい。そして、最後に。銀時。これからもずっとその刀をふるいなさい。『敵を切るためではない、己の魂を切るために。己を守るためではない、大切なものを守るために。』」

ギシッギシッ。
隣の部屋から聞こえる足音。

松陽は最後に銀時を抱きしめると襖の中に押入れ、つっかえ棒で封じ込めた。

銀時は松陽がいなくなってしまう恐怖と一人になってしまった孤独感とで震えた。
幼い銀時には襖を開けようにも開けることはできない。
刀は外に置いてきた。
必死に襖をたたき松陽を呼ぶ。

ギシッギシッ。

部屋の前で止まった足音。

スーッと襖が開く。

かと思ったら、次の瞬間には金属が交わる音が聞こえた。

いやだ。いやだ！！いやだ！！！イヤだ！！！！嫌だ！！！！

襖をたたく。襖をほるように抉る。指は血ににじみ始めた。それでも手は止めない。

怖い。

ただ、それだけだった。頬に冷たいものが伝った感覚がした。そんなことにも構っていられない。

外から人が倒れこむ様な音が聞こえた。

訪れる沈黙。

何か喋ってるようだが聞こえない。

はやく、助けなきゃ！！！

そう思いさらに手を力強く襖に押しつける。
しかし、一向に開く気配はない。これではらちが明かないと、暗闇に慣れてきた目で中を見回す。
すると、わずかに光を放つものを見つけた。
針だった。
これしかない。そう思い針を鷲掴みすると襖に叩きつける。

すると、一つの小さな穴が開いた。
小さな穴を何個も開けなんとか光が分かるほどになった。
久しぶりの明りに銀時は目を細めた。
襖に血だらけの手をくっつけ、目を凝らして外をのぞく。

そこには真っ赤な血を流しながらうつむく松陽と、刀を振り上げ今まさに松陽に振りかざそうとしている大柄な男。

「せんせ・・・」

やっと音となった銀時の声はむなしく響いた。

大柄な男の目がこちらに向く。しかし、銀時の視線は松陽に向かっており気付かない。

男は口元を下品に釣り上げると振り上げた腕に力を込めた。

最後に銀時が映したのは、

もっとも愛する者の

真っ赤な血。

終わりまであなたと居たいそれ以外確かな思いはないから（前書き）

長い。
途中で話切ろうとしたけど無理だった。
たぶん、一気に描いたから日本語ぐちゃぐちゃ＞＜

なので、助言ください！

ではどうぞ＾＾／

終わりまであなたと居たいそれ以外確かな思いはないから

松陽は血の中に倒れた。
顔は蒼く瞼は固く閉じられていた。
しかし、

その頭と体は

つながってはいなかった

「せんせ・・・？」

銀時は瞬きもせずにただ呆然と見つめた。

あの、いつも優しく微笑んでくれた松陽が。時には厳しく叱ってくれた松陽が。自分を人間にしてくれた、人間である証をくれた松陽が。

「せんせッ・・・。」

死んだ。

「せんせェエエエ！！！！！」

銀時はもがいた。早く松陽のそばに行きたい。
きっとうそだと、これは先生のいたずらなんだというのを確かめたい。
自分がそばに行けば、先生はきっと目を開けて、ごめんなさい、といって笑ってくれるはずだ。
そっと抱きしめてくれるはずだ。

襖に着いた血で手が滑る。
それにも構わず叩き続ける。

「せんせい！！せんせい！！！！せんせい！！！！せんせい！！！！」

すると、突然襖があいた。
銀時は反動で前に転げた。
混乱しながらも顔を上げた。視界に入ってきたのは松陽のかお。
銀時はそっと松陽に触れようと手を前に着いた。
ピチャ、という液体の音が静かな部屋に響く。
そっと松陽から視線をずらし、己の手に目を向ける。
それは、まぎれもなく松陽の血だった。
手だけではない。転げた時についたのか、銀時は血で真っ赤に染まっていた。

「あ・・・ああッ・・・ああああ、あああああああああ゛あ゛あ゛あ゛あ゛あ゛あ゛!!!!!!!!」

銀時は松陽の頭を抱えて泣き叫んだ。
その目は光を映してはいない。なにも映してはいなかった。

「おい。ガキ。」

松陽を殺したであろう男、手に血のついた刀を持ち銀時に呼びかける。
しかし、完全に心が壊れてしまった銀時は反応を示さない。

そんな銀時に男は気味悪さを覚えた。
銀色の髪に白い肌。それはすべて目の色に染まっている。
こんなにも血が似合う人間はいないだろう、と思った。

男はなにも言わずに、部屋の灯りに火を灯すとその火を近くの障子に映した。
障子はどんどん燃えて行き、畳にも天井にも移る。

その時、銀時は見た。
その男のマントから垣間見えた肌を。
それは人間のものとは思えない緑色の堅そうな肌。あるはずのない角。
そして、不気味に光る目。

男はマントをなびかせ去って行った。

「いや～。いい湯だった！」

その頃近藤達一行は、桂家でくつろいでいた。
神楽や新八は桂にトランプというものを教えていた。
最初は未来の事をここで教えてもいいのか、とも思ったが、トランプ一つで変わることもないだろうと思い、好きにさせた。

「トシ！お前も一緒にやらんか！」

一人夜風にあたり和んでいた土方に、トランプに参加することになったらしい近藤に声をかけられた。

「ああ。」

「よし。土方さんが負けたら切腹ですぜィ？」

「っんでンなことで切腹しなきゃいけねえんだよ！てめぇがやりや

がれ！クソガキ！！」

「まあまあ土方さん。早くやりましょ？」

「そうアル。これだからマヨラーは呼ぶなって言ったネ。」

「これだから、って何！？・・・んで、なにすんだ？」

少々八つ当たり気味になった土方はそれでもトランプに参加してくれるようだ。したいならしたいと素直に言えよ死ね土方、などとこっそりと、いや、堂々といった総悟に土方はイライラを抑える。しかし、そんな中一人心ここにあらずと言ったようなものが一人。

「ヅラ、どうしたアルカ？そんな浮かない顔しテ・・・？」

そう、先ほどまでトランプという遊びを教えてもらってはしゃいでいた桂が、顔を曇らせ俯いているのである。

「いや、なんだか嫌な予感がして・・・。」

すると桂の部屋に従者が入ってきた。

「坊ちゃん！大変です！塾が、塾が燃えています！」

「なッ！それは本当か！？松陽先生は？銀時君は！？」

「分かりません！いま村の者たちが消火に向かいました！」

「銀ちゃん大丈夫アルカ？・・・」

「ヅラ！！！！」

突然の事にみんな固まっていると、ここにはいるはずがない高杉の声がした。

「晋助！塾が！先生が！銀時が！」

「知ってる！落ち着け。とにかく行くぞ！」

そういって高杉は桂の手を引き塾の方へ走って行った。

近藤達もあわててついて行った。

「急げ！森に火が移る前に火を消せ！」

「おい！吉田さんと銀時は！！」

「どこにもいない！たぶんまだ中だ！」

「なんてこった・・・」

「俺がさがしに行く！」

村塾の周りには水をたくさん持った村人たちが集まっていた。
未だに見えないこの家の主に、村人たちは最悪の未来を思った。
しかし、何かを悟った村長だけは、なにも言わず、燃え盛る塾を見ていた。

「吉田先生！銀時！いたら返事をしてくれー！」

二人をさがすため燃え盛る炎の中に飛び込んだ勇敢なこの男。
名は曾根田義男。村で農民をしている男だ。
持ち前の力と、正義感とで村人からは絶大な信頼を得ていた。
そんな男も若いころにはそれなりに荒れていたこともあり、そんな時松陽に助けられたのだった。
だから、そんな恩人である松陽をなんとしても助けたい。その一心で炎の中に飛び込んだ。

しかし、一向に二人は見つからない。普段は子供たちが集う教室。客間。大広間。と、言ってはみたが二人はいない。すると、リビングに来たところでどこからか燃え盛る音以外の音が聞こえてきた。そこは確か、松陽の部屋だ。曾根田は確信してそこに向かった。

その襖を開けると、そこには火ではなく血で真っ赤に染まっていた。そして、そこの真ん中にたたずむ銀時を見つけた。どうやら、この血のおかげで部屋はあまり燃えていなかったらしい。血・・・？

そういえば、誰の・・・？

「銀時・・・？その手に持ってるのは・・・」

一歩踏み出した曾根田の右に見えたのは、首から上をなくした、松陽の無残な姿だった。

銀時は己の名を呼ぶ声に振り返った。その目は相変わらず荒んでおり、手には松陽の頭が抱えられたままだった。

「ッ！！！」

曾根田は嘔吐感に駆られた。しかし、今は銀時を救うことが先決だと思い直し、真っ赤に染まった銀時を抱きしめるようにし立ち去ろうとした。しかし、

「先生は・・・？置いてくの？」

子供のものとは思えない、何の感情も含まない声に愕然とした。

「せんせい、せんせいも連れてって。せんせいを助けて。ねえ。」

曾根田はそんな銀時の呼びかけを無視して走り出す。
すると、今度は怒りを露わにした。

「離せ！！！せんせいを置いてくな！！！離せッ！！！！！」

ゴトッ、と松陽の頭が銀時の手から転がり落ちた。暴れすぎたせいで落としてしまったのだ。

「せんせッ！離せ！せんせいッ！せんせい！せんせい！！」

銀時は壊れたように『先生』と呼び続けた。
どうして、こうなってしまったのか。曾根田はなぜか罪悪感にうなされた。

「ごめん・・・ごめんなぁ。」

そうしてやっと外に出た曾根田と銀時に、村人が集まった。
そこに、二つの幼い叫び声が聞こえた。

「「銀時！！！」」

よく銀時と遊んでいた、高杉家と桂家の子供たちだった。その後ろからも見知らぬ者たちが続いてきた。
そこで曾根田の気は失われた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8338w/

千日紅

2011年12月30日01時48分発行